待つしかないハンドタオル

数日前、下校の見届けに向かった時でした。ガードパイプに掛けられた一枚のハンドタオルが目に留まりました。恐らく、拾った方がかけてくださったのでしょう。しかし、広げられたままだと、風で吹き飛ばされ、車に踏まれたり落とし主の目に留まらなかったりするかもしれないと思い、私はそれをたたんでガードパイプの柱のすきまに挟んでおきました。

翌日もハンドタオルはそこに挟まったままでした。落としたのは中学生ではない可能性もありますので、学校にもっていくこともできず、見守るしかありませんでした。その日の夕方も、ハンドタオルは持ち主にみつけてもらえるのを静かに待っていました。

ハンドタオルのことが私の中で徐々に薄れ始めた頃、一緒に生徒たちの登校を見届けてくださっているＩさんからうれしいことを聞きました。

「女の子があのタオルをもっていったよ。」

道路の反対側で生徒たちの横断に気を配っていたので、私は気付きませんでした。タオルを挟んだ場所に目をやると、確かにタオルの姿は消えていました。

「やっとみつけてもらえたかぁ……よかった！よかった！」

私は安心しました。そして、なぜか、引き渡しをするときに安心して迎えの車に乗り込む生徒たちの姿を連想してしまいました。不思議です。迎えが来て安心する生徒たちの姿と、持ち主に引き取られていくタオルが重なってしまったようです。

しかし、迎えに来てもらえず、ずっと待ち続けているタオルたちもいます。下の写真は、職員室前の落とし物入れに入っているタオルたちです。九枚あります。ずっと持ち主を待っていますが、これまでお迎えがありません。持ち主に連絡を取りたくても連絡を取るすべがありません。生徒の皆さんのように話すことができればよいのですが……。

自分の手元を離れた私物は、皆さんにはどのように映っているのでしょうか。「タオルやハンカチぐらいいくらでもある」「探すのが面倒くさい」と言ったところでしょうか。もしそうだとすると、それまで利用するだけ利用しておいて、手元を離れたら知らぬ顔というのは、ずいぶん薄情な話だと私には思えます。

お迎えを待つ生徒の皆さんは、お迎えをする側でもあります。落とし物入れでは、手袋、シャープペンシルなどタオル以外のものも静かにあなたを待っています。教室移動のついででもよいので、見てやってくれませんか。

（六月十七日　記）